

まちのたから(40) 文化財室通信

シリーズ「日本遺産」第14話

今回より第4章、『裾野に広がる「大山信仰」』について紹介します。

大山信仰と水

大山の裾野に住む私たちは、大山がもたらす水の恵みをごく当たり前のように受けています。しかし、この水は大山のブナ林をはじめとする豊かな自然があつてこそその産物です。

選ばれし僧侶の修行・弥山禪定

大山寺で行われていた修行に、弥山禪定があります。年番で選ばれた僧侶2人が旧暦5月から法華経写経を始め、旧暦6月14日夕方に先達とともに大山山頂に登り、山上の池で写経した法華経を経筒に納め、前年に納められた法華経、霊水、薬草を持ち帰ります。薬草や霊水などは、下山後、信徒に配られました。池の水を汲むために使われていた約330年前の浄水器「閼伽桶（閼伽とは神仏に捧げる水）」が、米子市立山陰歴史館に所蔵されています。

江戸時代、寺が規制していたこともあり、大山は弥山禪定修行僧2人と先



▲大山のもひとり神事

達の僧侶2〜3人という、ごく限られた人しか登ることができない山でした。人が踏み入ることのない道なき道を進むのは、さぞ厳しい修行だったことと想像されます。大山は長い間、一般の人が入山できなかつたことで、豊かな自然が残り守られてきました。その後、大山登山が盛んになり、楽しまれるようになりました。大山の裾野に住む多くの方は、一度は大山登山の経験があるのではないのでしょうか。その一方で頂上の裸地化が進んだという一面もあります。

町内各小学校では、学校行事で大山登山をしており、一木一石運動など、大山にまつわる歴史的経過を、次世代の子どもたちも学んでいます。

大山のもひとり神事

さて、大山寺の弥山禪定は、大山寺が廃仏毀釈で明治8年に廃寺となつた後に、大神山神社奥宮の神事として引き継がれ、今に伝わります。

もひとりの「もひ」は、水を表します。7月14日に奥宮でお祓い（夕祭）が行われます。15日深夜1時半頃、安全祈願をこめた派遣祭が行われ、神官らが大山山頂に登り、山上の池で祝詞をあげ（頂上祭）、霊水を汲みとり、ヒトツバヨモギを刈り取って持ち帰り、社殿の神饌として供えた後、この霊水と薬草は参詣者に分け与えられます。薬草は牛に食べさせると良いとの信仰から、持ち帰って牛に食べさせたと伝わりまします。

大山山頂で霊水と薬草を採取するという、大山の原初信仰を残している点、廃仏毀釈という大きな変化を受けながらも行事が現在まで続けられている点で貴重であると評価され、平成24年2月24日に鳥取県無形民俗文化財に指定されました。

今年のもひとり神事は、7月14日に神楽や舞が披露され、15日に御神水が配布されるなど、大山開山1300年祭を記念した特別版で行われる予定です。ぜひ、この機会に、現在に伝わる大山信仰の一つの面影を感じとつ



▲神仏の加護を受けた牛たち

塩原の大山供養田植

広島県庄原市に伝わる「塩原の大山供養田植」が5月27日に行われ、大山信仰の繋がりがから、鷲見教育長が地元保存会から招待されました。

田植踊り・供養行事・代掻き・太鼓田植・お札納めの五行事から構成されます。神仏両方の祈禱を受けた牛が田に入り、かきでの先導で田を歩き廻る「代掻き」は往時を彷彿とさせます。当日は天候にも恵まれ、多くの方が見学をされていました。

保存会の方は「今の牛は」田に入る経験がないため、慣れさせるのが大変だ」と言っておられました。

大山信仰に基づく民俗行事が現在まで伝わり、さらに未来へと引き継がれることの尊さを感じずにはいられません。（人権・社会教育課 文化財室）